

## 第 7 章

# 和の規約

例えば,  $a_1x_1 + a_2x_2 + \dots + a_Nx_N$  は和の記号を使って短い表記で  $\sum_{i=1}^N a_i x_i$  と書くことができることは高校数学で習った. ここではさらに短い表記, 和の規約, もしくは Einstein の規約, と呼ばれるものについて紹介する. この表記を用いると, 複雑なベクトルの演算が非常に簡単にできる.

### 7.1 表記 (notation)

位置ベクトルを  $x$  で表す. 慣例によると  $x$  をデカルト座標系におけるその成分  $x, y, z$  で表すと,

$$x = x i + y j + z k \quad (7.1)$$

となる. ここで,  $i, j, k$  はそれぞれ,  $x, y, z$  方向の単位ベクトルである.

なお, 単位ベクトル  $i, j, k$  を, 添え字付きの文字を用いて, それぞれ  $e_1, e_2, e_3$  で表し, 成分  $x, y, z$  を  $x_1, x_2, x_3$  と表すこともある. 即ち添え字 1 が  $x$  成分, 添え字 2 が  $y$  成分, 添え字 3 が  $z$  成分を表す. この章ではこの表記を採用する.

この表記よると (7.1) は

$$x = x_1 e_1 + x_2 e_2 + x_3 e_3 \quad (7.2)$$

である. また任意のベクトル  $A$  は

$$A = A_1 e_1 + A_2 e_2 + A_3 e_3 \quad (7.3)$$

と表記する.

偏微分記号,  $\frac{\partial}{\partial t}, \frac{\partial}{\partial x}, \frac{\partial}{\partial y}, \frac{\partial}{\partial z}$  は簡単化のために,  $\partial_t, \partial_x, \partial_y, \partial_z$  と記す場合がある. これも先に採用した表記を用いると  $\frac{\partial}{\partial x_1}, \frac{\partial}{\partial x_2}, \frac{\partial}{\partial x_3}$  となるがさらにコンパクトに,  $\partial_1, \partial_2, \partial_3$  と

書く．このような表記では微分演算子  $\nabla$  は

$$\nabla = i \frac{\partial}{\partial x} + j \frac{\partial}{\partial y} + k \frac{\partial}{\partial z}, \quad (7.4)$$

$$= i \partial_x + j \partial_y + k \partial_z, \quad (7.5)$$

$$= e_1 \partial_1 + e_2 \partial_2 + e_3 \partial_3 \quad (7.6)$$

となる．

## 7.2 和の規約 ( summation rules, Einstein's notation )

和の規約とは

一つの項の中に同じアルファベットの添字が 2 回用いられているとき、その添字について 1 から 3 までの和をとる

ことである．すなわち、

$$\begin{aligned} \boldsymbol{x} &= x_1 \boldsymbol{e}_1 + x_2 \boldsymbol{e}_2 + x_3 \boldsymbol{e}_3, \\ &= \sum_{i=1}^3 x_i \boldsymbol{e}_i, \\ &= x_i \boldsymbol{e}_i. \end{aligned} \quad (7.7)$$

最後の最も簡単な表式が和の規約を用いて書かれたものである．和の規約とは上の式の 2 番目の表式において  $\sum$  を省略することとも言える．

注意 1: 添字はどんな記号でも良い．とにかく 2 回繰り返して出てきたら和をとればよい．つまり  $x_i \boldsymbol{e}_i = x_j \boldsymbol{e}_j = x_k \boldsymbol{e}_k$  である．このような理由から繰り返す添字は無効添字 ( dummy index ) と呼ばれる．

注意 2: 2 次元空間であれば、和は 1 ~ 2 にわたってとる． $N$  次元であれば、和は 1 ~  $N$  にわたってとる．

例:

$$\boldsymbol{A} = A_i \boldsymbol{e}_i. \quad (7.8)$$

$$\nabla \psi = e_i \partial_i \psi. \quad (7.9)$$

## 7.3 Kronecker のデルタ

2つの添え字を持ち，以下のような性質を持つ量を Kronecker のデルタという：

$$\delta_{ij} \equiv \begin{cases} 0, & (i, j \text{ が異なる値を持つとき}). \\ 1, & (i, j \text{ が同じ値を持つとき}). \end{cases} \quad (7.10)$$

Kronecker のデルタの別の定義は

$$\mathbf{e}_i \cdot \mathbf{e}_j = \delta_{ij} \quad (7.11)$$

である。または，

$$\frac{\partial x_i}{\partial x_j} = \partial_j x_i = \delta_{ij}. \quad (7.12)$$

例： 和の規約と Kronecker のデルタを用いると  $\nabla \cdot \mathbf{A}$  は以下のようにかける：

$$\begin{aligned} \nabla \cdot \mathbf{A} &= (\mathbf{e}_i \partial_i) \cdot (A_j \mathbf{e}_j) \\ &= \mathbf{e}_i \cdot \mathbf{e}_j \partial_i A_j \\ &= \delta_{ij} \partial_i A_j \\ &= \partial_j A_j. \end{aligned} \quad (7.13)$$

(デカルト座標系では  $\partial_j \mathbf{e}_i = 0$  である。)

## 7.4 Eddington のイプシロン

3つの添え字を持ち，以下のような性質を持つ量を Eddington のイプシロンという：

$$\varepsilon_{ijk} \equiv \begin{cases} 1, & (i, j, k) = (1, 2, 3), (2, 3, 1), (3, 1, 2) \text{ のとき}. \\ -1, & (i, j, k) = (3, 2, 1), (2, 1, 3), (1, 3, 2) \text{ のとき}. \\ 0, & \text{それ以外の場合}. \end{cases} \quad (7.14)$$

$$\varepsilon_{ijk} = -\varepsilon_{ikj}. \quad (7.15)$$

$\varepsilon_{ijk} = 1$  となる場合は  $(i, j, k) = (1, 2, 3)$  の偶置換， $\varepsilon_{ijk} = -1$  となる場合は  $(i, j, k) = (1, 2, 3)$  の奇置換という。

例

行列

$$\underline{\mathbf{A}} = \begin{pmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{pmatrix}$$

の行列式は, Eddington のイプシロンを用いると

$$\begin{aligned} \det \underline{A} &= \begin{vmatrix} a_{11} & a_{12} & a_{13} \\ a_{21} & a_{22} & a_{23} \\ a_{31} & a_{32} & a_{33} \end{vmatrix} \\ &= \varepsilon_{ijk} a_{1i} a_{2j} a_{3k}. \end{aligned} \quad (7.16)$$

とあらわせる. また二つのベクトル  $A$  と  $B$  とのベクトル積は

$$\begin{aligned} \mathbf{A} \times \mathbf{B} &= \begin{vmatrix} \mathbf{e}_1 & \mathbf{e}_2 & \mathbf{e}_3 \\ A_1 & A_2 & A_3 \\ B_1 & B_2 & B_3 \end{vmatrix} \\ &= \varepsilon_{ijk} \mathbf{e}_i A_j B_k. \end{aligned} \quad (7.17)$$

となる. 同様にして回転演算は

$$\begin{aligned} \nabla \times \mathbf{A} &= \begin{vmatrix} \mathbf{e}_1 & \mathbf{e}_2 & \mathbf{e}_3 \\ \partial_1 & \partial_2 & \partial_3 \\ A_1 & A_2 & A_3 \end{vmatrix} \\ &= \varepsilon_{ijk} \mathbf{e}_i \partial_j A_k \end{aligned} \quad (7.18)$$

と表現できる.